

◆三◆ 緊急時のトリアージ

雪は積り、足元は凍りついている。震えながら空腹と喉の渴きを覚え溜息をつきながら階下を見る。日付は十二日になり夜も明けようとしていた。用を済ませようと立体駐車場の四階へ降りてゆくと、隅の辺りで発泡スチロールの蓋に包まれベニヤ板を被せられた物体に遭遇した。よく見ると人が横たわっていた。隣には若い男の人が一人立っていて、離れた場所に救急隊員が数名、救急車から運びこんだ荷物の海水を拭う作業をしていた。驚きと同時に理由を男性に聞くと、近くの交差点に自転車で飛び出し車に跳ねられた人と判った。友達ですかと聞くと、ただ偶然遭遇したからそばについているとの返答。自分の身の安全さえ確保できぬ状況下、不思議さを覚えた。

とっさにあの時の事故だと直感し、即座に状態観察を開始。明らかに低体温、脈と呼吸は微弱、外傷はほとんどないが、瞳孔は片方散大し不同が出ていて麻痺も見受けられた。

急性硬膜下血腫か脳挫傷、脳圧が上昇していると察し緊急開頭手術が必要なことを推察した。

救急隊員に話を聞くと、搬送途中で津波に遭い、救急車は山に乗り上げてしまい、やむを得ず泳いで担架ごとここまで移送させてきたらしい。冷たい水の中を泳いで担架を運ぶのは想像を絶する。もし私も同じ立場だったらと思うと気力の低下、疲労も理解できる。けれども何の処置もせずこのままでは死ぬのを待つだけと思い状態観察を続けた。スチロール箱による保温、気道の確保をしながら、意欲の低下が見受けられた隊員に、点滴器具と蘇生器具を救急車に取りに行くよう指示して下顎挙上をした。唇の色がチアノーゼから少し戻り始めた。介護士中田君に、彼には経験のない気道の確保を説明し、下顎の挙上を維持させながら輸液ラインを確保。舌根沈下が激しく器具にて気道の確保をしながらアンビューバッグにて呼吸をアシストした。外は完全に明るくなってきていてヘリコプターが頭上を飛んでいるのが分かり、避難者全員でヘリコプターに助けを求め叫んでいる。駐車場屋上にはSOSの文字ができてくるが、ヘリコプターは近くの小学校に救助のため離着陸していると他の避難者から情報が入った。

もう三時間位人工呼吸をしているが、痙攣発作も頻回となり生命の危機を感じ始めた。脈も微弱、自己の呼吸は停止寸前、決断の時と思い「小学校に連れて行きますよう、小学校なら優先的にヘリに乗せてくれるでしょう」と救急隊員を説得すると「まだ水は腰までありますが行きますか」と聞かれた。「行きますよう」

担架は隊員と中田君が持ち、人工呼吸は私が担当して外へ出た。水位はまだ相当あり水に入るのは凄く抵抗があったが、目をつむりながら足を踏み入れた。正直これで靴が駄目になるし新幹線に乗るのは無理だ、その時はそう思いながら水に入った。水は冷たく足元は汚泥で滑り腰まで浸かりながら進んだ。流された家が道路の真ん中を封鎖しており、車や瓦礫を避けながら向かったが、周りには遺体が多く流されていた。

アンビューバッグを押し自発呼吸を援助していたが、呼吸回数が徐々に減少してくるのが手に伝わってきた。「止まって下さい」と救急隊員にお願いし、水が少ない場所を選んで患者さんを降ろした。心臓マッサージを開始したが心拍動は戻らず、瞳孔は散大を確認したがもう少し続けようとしたら救急隊員に言われた。

「トリアージですよ、もうやめて遺体を置いて行きますよう」

その言葉はすごく重かった。

この災害時救急に直面し、医療人としての自覚でやっていた行為が、私自身を満足させるためだったのかも知れない。他の職員が島を守るために必死になっている姿を想像し、自分も頑張っていると思いたかったのかも知れない。

”トリアージ“

数パーセントの救助にかけることも大切であるが、今は一〇パーセントの命を救う方に力を向けることが必要なのだと遺体を前に思った。

誰も当てにはしない、自立、自分の立場を考え、どんな時でも自己の職務を全うする。そして今戻るべきは島だ、網地島へ戻ろうと強く決意した。

遺体を安置する場所を探す。被災に遭った葬儀場を偶然見つけたが、室内外は汚泥と瓦礫にまみれ荒れ果てていて、津波で亡くなられた方々の遺体が散乱していた。事務室のソファを起こし遺体を横たえ手をあわせた。事故死と判るよう、処置の経緯と点滴ルートはそのままに、死亡推定時間のメモを残した。

発行に寄せて

医療法人 陽気会 とちの木病院

理事長 早乙女 勇

三月十一日、あの日私は県庁内公館大会議室で栃木市の三病院統合再編等について話し合うため「第三回県南地域医療コンソーシアム」に出席中、東日本大震災に遭いました。震源地がとちの木病院の分院網小医院のある網地島沖と知り愕然。その後、待ちに待った谷中副施設長からの携帯メール。「島の入所者、職員全員無事」との第一報に私は「谷中自身の命を第一に考えて行動せよ」と返しました。

震災から一週間後、私がスタッフ四名と共に島へ向かう際、通行可能な道を息子がインターネット上で検索した結果、ホンダのカーナビゲーションシステムの「通行実績情報マップ」を頼りに石巻を目指しました。

島へと渡る自衛隊ヘリから見た光景は想像を遙かに越えており、今でも目に焼きついています。

網小へようやく辿り着いた時、まず驚いたのは、ライフラインが完全にストップし暗く寒い中、落着いて行動している職員達の姿。各々が自分で考え自分の果たすべき仕事を着実にこなしており、全体が大きなチームとして機能しているのを見て大変心強く思いました。

本文中にもあるように、石巻市街地の医療機関も大きな被

害を受けました。石巻市には市立病院（二〇六床）と平成十八年に移転新築した石巻赤十字病院（四〇二床）の二つの基幹病院がありますが、市立病院は津波による甚大な被害を受け、入院患者を救助しなければなりませんでした。一方赤十字病院は、移転前には市立病院の北上川対岸にあり今回の津波の被災地域でしたが、内陸に移転していたため津波による難を逃れることができ、震災直後には一時一二〇〇名を収容するなど被災地の緊急医療に大きく貢献しています。

ひるがえって栃木地区に目を向けると、栃木市内に三病院統合再編の構想がありますが、三・一一を経験した今だからこそ、大災害など万が一の事態に対応出来るような建物・立地等の態勢作りを切に望みます。

今回の大震災で重大な責務を全うしてくれた谷中副施設長。彼の貴重な経験を広く知って頂けたらと、この本の執筆を依頼しました。

最後になりましたが、この度の震災で網小医院を心配して下さった皆様、義援金や物資等のお心遣いを寄せて頂いた方々に、深く御礼申し上げます。